

同志社大学図書館司書課程の歴史については、その発足後30年の段階で青木次彦が「同志社大学図書館学教育史稿」（『図書館学の教育』日本図書館学会研究委員会編、日外アソシエーツ発行、1983年9月 p.41～64）において一度まとめている。本誌では第一章にこの青木による原稿を再掲載し（ただし p.11の写真は、本稿で追加したもので、青木の原稿には存在しない）、第二章にて青木論文以後を中心として図書館司書課程の変遷を簡潔にまとめることとする。

「同志社大学図書館学教育史稿」の再掲を許可いただいた青木次彦氏のご遺族ならびに日本図書館情報学会研究委員会に感謝します。

（同志社大学図書館司書課程60周年記念誌編集委員会）

同志社大学図書館学教育史稿

青 木 次 彦

はじめに

わが国の大学において図書館学教育が行なわれるようになったのは殆んど全てが戦後（1945年以後）であるといっても過言ではなかろう。そして同志社大学でも、その例にもれず1951（昭和26）年から始められたのである。しかも大学における図書館学教育とはいいいながら、その多くが『図書館法』の公布に伴って必要となった司書の資格を現職者の再教育によって付与する主旨から始められた司書講習が、そのまま大学に持ち込まれて司書課程となったといえようが、同志社大学の場合も同列であり、それが実質的に発足したのは翌1952（昭和27）年からであると考えられる。しかし、同志社大学の場合は大学自体が図書館学教育を始める以前に、そして、それはまた『図書館法』の公布以前でもあるが、その萌芽が大学図書館のなかにあったのである。それは1941（昭和16）年に発足した同志社大学図書館学研究会であり、また1946（昭和21）年からこの「研究会」が主催して1951（昭和26）年まで前後6回にわたって続けられた同志社大学図書館学講習所である。そして第6回目のこの「講習所」が実質的には発展的に大学自体が主宰する同志社夏期大学の「図書館学」に移行し、さらに同志社大学の司書課程へと発展

したのである。そのような事情もあるので、まず同志社大学図書館学研究会の時期からはじめ、上述のような経過を顧みるとともに、さらに現状や将来の展望にも言及してみたいと思うのである。司書課程が発足してから30年が経過しようとしている、この時期にこのような機会を与えられたことを感謝しつつ筆を進めよう。

I 同志社大学図書館学研究会のこと

1941（昭和16）年4月にはじめられた同志社大学図書館学研究会については既にいくつかの報告記事や論文など^①もあるが、ここではこの研究会の講習的側面を中心に述べておきたい。

もともと、この「研究会」は同館の館員による研究団体であって、館員自身の図書館意識の昂揚と図書館技術の向上を目的としたささやかなもので、原則として月1回、館員おのおのが、自分ながらに研究調査したテーマを発表し、また講師を招いて講演を聴くといったものであって全体としては図書館学教育の範疇に入るものではない。しかし第1回の研究会が主宰者小野則秋氏（同館司書）による、当時編纂途上にあった青年図書館員聯盟の『日本目録規則』に基く「一般目録法及実習」の講習会であり、これが4月2、4、5日の3日間にわたるものであったことが示すように、講習会的側面をもつものとして発足している。このような講習的なものはこの第1回のほかにも散見し、第20回（1943年1月27、28、29日）の「目録法並に実習」（講師：小野則秋）、第33回（1944年9月6、7日）の「簡易図書修理法講習会」（講師：間宮不二雄）などは全くの講習会といえよう。これ以外にも智識・経験豊富な先輩の発言を若い館員が聴くというような講習乃至は研修といったものがあり、しかも自館館員を対象としたばかりではなく、参加者も暫時広め、いつの頃からか開催の都度、地元新聞に予告されるとともに「研究会」自体からも京都近隣の公私立・大学・学校の図書館へ案内状を出して、図書館人や一般社会人に参加を呼びかけていたのである。特に講習会の場合は事前に申込みを受け、会費を徴収したときもあったと思われ、第20回の場合の申込書によれば京都大学付属図書館（2名）、大谷大学図書館（1名）、立命館大学立命館文庫（3名）、和風図書館（2名）、京都高等蚕糸学校（1名）などの参加が確認され、また第33回の際も京都帝国大学付属図書館（2名）、龍谷大学図書館（2名）、立命館大学立命館文庫（2名）、京都繊維専門学校図書館（1名）、臨済学院専門学校（1名）、~~と~~京都植物園大森文庫（1名）と申し込みがあり、会費受領のことも記録されている^②。このような研究会、講演会、講習会は前述のように1941（昭和16）年に始まって戦時中続けられ、敗戦後も1945（昭和20）年10月と12月に開催されている。その後は断続的ではあったが1961（昭和36）年まで、主として講演会、研究発表会としてつづけられた。その間に1952（昭和27）年4

月には名称を改めて同志社大学図書館学会としたのである³⁾。この「研究会」そのものは大学における図書館学教育ではないが、既に指摘したようにこの「研究会」が戦前の活動のなかに内包していた講習的側面は、やがて1946（昭和21）年、わが国戦後の図書館員養成機関のうちで最初のもたとされる同志社大学図書館学講習所の開設へと発展したといえよう。

この「講習所」は最初に述べたように、「研究会」が主催して1946（昭和21）年10月9日に開設されたのである。そして館員を中心とした極く内輪のものであった「研究会」も、この「講習所」開設を機に『同志社大学図書館学研究会会則』が同年10月の総会で成文化され、その事業の第1に「図書館学講習所ノ開設」を掲げたのであった⁴⁾。

Ⅱ 同志社大学図書館学講習所の開設

前項のように同志社大学図書館学研究会はその事業の一つとして、しかも画期的な事業として同志社大学図書館学講習所を開設することとなったが、その趣旨は、その主宰者で「研究会」の委員長であった小野則秋氏が後年「終戦後日本の図書館界は館種の如何を問わず、一様に一種の虚脱状態に陥っていた。それに戦争による有能館員の応召、徴用等によって図書館の人的体制は極度に弱体化（中略）かろうじて図書館を形ばかり



（写真提供：同志社大学図書館）

に維持するのがやっとの状態に追い込まれ（中略）この状態を如何にして打開し、新しい民主主義建設のレールの上に図書館活動を乗せるかということは、（中略）むつかしい問題であった。しかもこれは自館だけの問題ではなく、広く日本全体の図書館問題でもあった。（中略）図書館意識の昂揚と図書館技術の向上を目的とした図書館員教育こそが、この問題解決の突破口である」と述べている⁵⁾。そして第1回「講習所」を開設するに当たっての案内状冒頭の『同志社大学図書館学講習所趣意書』には「此の試みが一つの導火線となって、我が国図書館員養成機関設置の要望が起り、将来或は図書館専門学校が設けられ、大学専門学校に於て図書館学専攻講座の設けられる日があるとしたならば、最早我々のこの目的は達成されたるものとして、寧ろ本講習所の必要もなくなる日の早きことを喜ぶものであります。」（昭和21年9月20日付）⁶⁾とし、わが国の図書館学教育の出発に一石を投ずるべく、鬱勃とした意欲と、先輩同僚の同志的協力とによって、徒手空拳のような状態で開設に漕ぎつけたといえよう。

そして、1946（昭和21）年10月9日、来賓、講師、聴講者30数名が参加し開講式を挙行、同志社総長牧野虎次氏が挨拶を、宝塚科学図書館長戸沢信義氏が祝辞を述べられたのである。当日午後からは早速講義もはじめられ、以降毎週水曜日毎に開講され、翌1947（昭和22）年3月26日まで約6ヶ月間、延べ100時間が実施され全課程を終了した者は19名（同志社図書館員9名を含む）であり、講義題目・講師は次の通りであった。

図書館経営学（竹林熊彦）

図書館管理学（木寺清一・小野則秋・天野敬太郎）

図書館史（小野則秋・竹林熊彦）

閲覧読書指導（仙田正雄）

図書館教育（小野則秋）

図書館運営論（神波武夫・竹林熊彦・仙田正雄・戸沢信義）

図書館統計法（小畑涉）

世界図書館事情（加藤龍太郎・木寺清一・竹林熊彦）

書誌学（鈴鹿三七）

古文書学（田中良一）

新聞学（不破隆三）

以上のように講師陣は錚錚たる斯界の先達であったが、どちらかといえば現職初心者の研修の色彩が濃いものであったといえよう。なお聴講料は全課程50円、1単位（10時間）6円であった⁷⁾。このようにして第1回を無事終了、ついで新年度1947（昭和22）年には6月3日から第2回の「講習所」を開設し、当年度は毎週火曜日に開講、夏期休暇中は休講し11月25日まで、前回同様延べ100時間が実施されたが、全課程の終了者は11名と少なかった。これは前回から日ならずして行なわれたためであろうか。講義題目・

講師は次の通りで、さして変化は見られない。ただ聴講料は当時のインフレーションを反映して全課程100円と倍増、1単位（10時間）の場合は20円としている。

図書館経営学（竹林熊彦）

図書館管理学（天野敬太郎、小野則秋、木寺清一、竹林熊彦）

図書館史（小野則秋、竹林熊彦）

閲覧読書指導（仙田正雄）

図書館教育論（小野則秋）

図書館運営論（竹林熊彦、神波武夫、戸沢信義、仙田正雄）

図書館統計法（小畑渉）

世界図書館事情（加藤龍太郎、木寺清一）

書誌学（鈴鹿三七）

古文書学（田中良一）

新聞学（不破隆三）

以上のほか課外講義や討論会なども行ったようである^⑧。

第3回の「講習所」は1948（昭和23）年5月13日から10月27日まで、夏期休暇中を除いて毎週火曜日に開講、これも前2回のもので大きな変化はなかったが全課程の終了者は25名と盛況に向った。相変らずのインフレーションのためもあって聴講料は又もや200円と倍増した。講義題目・科目は次の通りである。

図書館経営学（竹林熊彦）

図書館管理学（竹林熊彦、木寺清一、小野則秋、天野敬太郎）

閲覧読書指導法（仙田正雄）

図書館運営論（戸沢信義、西藤寿太郎、竹林熊彦、仙田正雄）

図書館史（小野則秋、竹林熊彦）

世界図書館事情（加藤龍太郎、木寺清一）

図書館教育論（小野則秋）

図書館統計法（小畑渉）

書誌学（鈴鹿三七）

古文書学（田中良一）

新聞学（不破隆三）

なお10月27日には折から入洛中の間宮不二雄氏が特別講演を行い、また同日午後の終了式には来賓として祝辞を述べて、錦上花を添えたのであった^⑨。

ついで1949（昭和24）年には引き続いて第4回の「講習所」が開設されるのであるが、戦後4年を経過して新生日本の新しい教育体制も1946（昭和21）年の『日本国憲法』の公布にはじまり、1947（昭和22）年、『教育基本法』公布、1948（昭和23）年『学校教

育法』、1949（昭和24）年『社会教育法』公布と、続ぞくとして固められ、大学図書館、学校図書館の新設・整備や公民館図書室などの新設が進められるようになって、この年度については「特に学校図書館、公民館図書館の新設のための理論と技能に重点を置」いたものを指向して開設されることとなった¹⁰⁾。形式的には従来のもと同様で、4月27日から11月1日まで、夏期休暇の期間を除いて毎週水曜日に開講し、延120時間と増強された。講義科目も趣旨に沿って、実務的なものに重点が置かれたといえようが、凡そ次のようなものであった。

図書館設置事務論（小野則秋）

一般図書館経営学（西藤寿太郎）

学校図書館経営論（竹林熊彦）

図書整理法（木寺清一、小野則秋、天野敬太郎、戸沢信義、辰井隆）

目録組織法（小野則秋、小倉親雄、仙田正雄）

参考事務（西藤寿太郎）

図書館統計法（小畑涉）

謄写印刷法（鈴木正次）

読書指導（小畑涉）

なお、上記以外に特別講義、課外講演なども行なわれた。この第4回の終了者は当時の館界の事情を反映してか40名を数え、盛況であったといえよう。ちなみに聴講料は相変らずのインフレーションで500円と増額されている¹¹⁾。

そして第5回「講習所」は1950（昭和25）年、館界挙げて待望した『図書館法』公布を目前にして、4月26日に開講式を挙げ、前年と同じく夏期休暇を除いて12月13日まで毎週水曜日に総計130時間として実施された。「近く図書館法案に基づく資格認定の問題もあり多数聴講されます様希望致します。」¹²⁾と述べているが『図書館法』の公布という館界にとって一大転期を控えて前回より多数の参加が予想されたが、終了者は48名と前回をさらに上回って盛況であったといえよう。聴講料は700円と漸増している。今回の講義科目については前回とも多少相違はあるが、実務関係科目を重視する傾向にあったといえよう。科目・講師の概要は次の通りである。

図書館経営学（竹林熊彦、重久篤太郎、多田光、西藤寿太郎、小畑涉）

図書整理法（竹林熊彦、木寺清一、多田光、青木次彦、天野敬太郎）

目録編成法（仙田正雄、小倉親雄、青木次彦、天野敬太郎）

図書運用法（木寺清一、小畑涉、北村信太郎）

図書館史（竹林熊彦）

書誌学（多田光）

特別講座（松井七郎、増野肇、小畑涉）などとなっている¹³⁾。今回の講師のなかに中

心的役割を担ってきた小野則秋氏の名前がないのは次のような理由からであった。すなわち「たまたま昭和24年9月、当時私が関係していた文部省学術奨励審議会学術用語分科審議会の委員として身分関係で、突如中央教職適格審査委員会から教職不適格の判定をうけた。これは私の執筆した図書館関係の論文がフィヒテの言論やクリークの学説の一部などを引用した国家主義全体主義的戦争謳歌の思想であるという偏狭極まる判定で、勿論再審要求をして抗争したのであるが、再審査で解除された昭和26年の夏までその間完全に同志社大学図書館とも絶縁され、この2ヶ年間はあらゆる学会活動からも隔絶の止むなき次第となった。」¹⁰⁴ 当時はまことに余儀ないことで、地元では京都図書館協会を中心に館界挙げて再審請求・解除のための署名運動を行ったが、「講習所」にとっては大きな打撃であった。この間従来から小野則秋氏を補佐して庶務事務を一手に引き受けてきた小畑渉氏（同志社大学図書館司書）と、それを館内から助け協力していた多田光氏（同館司書）のコンビと、さらに広範な先輩、同僚、後進諸氏の協力、援助によって中断することなく、続けられたことは不幸中の幸いであって、当時の館界の同志的団結によるものといえよう。

それはともかくとして、この年4月30日には法律第118号として新しく公布された『図書館法』が7月30日に施行され、同年9月6日、文部省令第27号として『図書館法施行規則』が定められるが、その「附則2」で「同志社大学図書館学講習」のうち昭和23年度、同24年度の講習を受け修了証を授与されたものに対しては『同施行規則』第4条の科目のうち「図書館実習」「図書目録法」「図書分類法」および「図書館史」について、それぞれ1単位合計4単位を修得したものとすることが定められ、「講習所」の実績が法的にも認められたことは朗報であった。またこれとは別に京都府において「同志社大学図書館学講習」の各年度の終了者のうち現に府下の小、中、高等学校教員である者に対して、『教育職員免許法施行規則』附則3および4の規定による5単位が追認された¹⁰⁵。いわゆる「教員認定講習」の代替として認められたわけである。

1951（昭和26）年度については当初、従来通り第6回「講習所」として4月18日から11月28日の間、8月は夏期休講として毎週水曜日に開講し、計12科目、145時間が予定され、一応開講はされたが7月に入って中止されることとなった。これは前年『図書館法』が施行されて司書・司書補の資格ならびに、その取得についても定められて、従来のような任意団体である「研究会」が主催する「講習所」では実質はともかく、資格取得という面では法的に不相当であり、その点で受講者にも不利であると考えて、前年度後半から文部省社会教育局施設課図書館係長武田虎之助氏には再三、助言を請い、また東洋大学図書館の和田吉人氏、早稲田大学図書館の大塚芳徳氏などには、それぞれの大学における対応について問い合わせ貴重など意見を得て、同志社大学に於ける図書館学教育の今後のあり方が検討され、いくつかの試案が考えられてはいたが、成案に至らない

まま時間切れの格好で、ともかく上述のように「講習所」として出発したのであった。それでも前回並の41名の受講者を得、従来よりもさらに整備されたカリキュラムであったといえよう。これは『図書館法施行規則』の科目などを参照したことにもよろうが類似点が多く見られるものであった。講師についても従来と大きく変化することはなかった¹⁰⁾。

いうまでもなく、この1951（昭和26）年には『図書館法』第6条による文部大臣委嘱の、いわゆる「司書講習」が各地の大学ではじめられた年であり、内実そのような「司書講習」と同程度以上と自負していた「講習所」で司書資格が与えられないというのは何としても不合理であると考えて、この「講習所」を大学自体が実施する講義への切り替えの検討がさらに続けられた。その結果、この年度については取りあえず、同志社大学が前年から実施していた年間を通じて行なわれる大学教育の一環であって、学科内容も授業時間数も正規の課程と同一のものと位置付けていた同志社夏期大学(Doshisha University Summer Session)に図書館学科目の若干を設置開講し、これを履習することによって大学の単位認定を得、それを積み重ねることによって司書資格の取得を可能とすることに決し、早速、この年度の夏期大学から開講することとなったのである。当初から十分に方向が確定できず、上記のような途中変更という事態になったのは大学全体の不馴れということもあるが、他にもその理由が考えられよう。その一つは「講習所」を運営してきた同志社大学図書館は当時大学図書館とは称していたが組織上は同志社の法人本部に属していて大学との意志の疏通などに不十分な面があったのではないかとと思われること。また本来図書館の業務でない不馴れな教務事務を取扱ったこと。また大学の教員層のうちに図書館学が、特に現実に行なわれて来ている「講習所」でのそれが、大学教育には馴染まないものではないかという疑問があったとしても当時は不思議ではなからう。そのような、いくつかの障害があって、スムーズな切り替えができなかったのではないかとと思われるのである。

以上のような曲折を経て、しかも不十分なままで、やっとこの年、同志社大学における図書館学教育は開始されるに至ったのである。

Ⅲ 司書課程の発足

前節にもふれておいたが、同志社夏期大学は大学で夏期休暇中に実施される講座を一括して夏期大学と称していて、これは普通の講習会、あるいは公開講座とは異なって年間を通じて行なわれる大学教育の一環であり、学科内容も時間数も正規の課程と同一で、それを夏期休暇中という比較的短期間に集約的に勉学できる利点さえもつものであった。学生はそこで履習した科目と単位を正規の課程に計上でき、不足科目単位を補い、また

平常の勉学の負担を軽減する機会ともなった。そして、ともすると過重になる教職課程、司書課程などの履修にも好都合であり、また学生各自の専攻と異った科目を選択履習する余裕をもつこととなり、新制大学の求められていた視野の広い教育に有効でもあった。そして当時、関西の私大の中には、この「夏期大学」の教職課程を、それぞれの大学の科目と同一と認める諒解があったし、また一般世人にも認識されて聴講生も追おいに増えたことなど、大学解放の一つの動きであったといえよう¹⁰⁾。このような組織がたまたまあったので1951（昭和26）年の夏から「夏期大学」に当面「図書館学」6科目6単位を設置して学生、聴講生の履習と単位の認定を可能にした。その設置科目と講師は次の通りで、科目の名称は『図書館法施行規則』の科目（省令科目）と同一であった。

図書館通論〔1単位〕（重久篤太郎、小畑渉）

図書選択法〔1単位〕（竹林熊彦）

図書及び印刷史〔1単位〕（多田光）

レファレンス、ワーク〔1単位〕（木寺清一）

特殊資料〔1単位〕（天野敬太郎）

児童に対する図書館奉仕〔1単位〕（仙田正雄）

なお、聴講生は「講習所」の聴講者で引き続き参加した人よりも改めて参加することとなった人の方が多く、聴講生は合計で70数名を数えた。

そして、この「夏期大学」における「図書館学」の科目は、科目の名称変更や、「夏期大学」自体の名称が夏期講座と改称されることはあったが、この年から引き続いて、1977（昭和52）年に夏期講座自体が無期休講となるまで毎夏開講されていたのである。

一方において、1952（昭和27）年4月からは文学部に自由選択科目として、また教職課程にも教職に関する専門科目の選択科目として、それぞれ「図書館学」1科目ずつが設置されることとなった。そして前年「夏期大学」においては省令科目に準じていたが、大学の正規の授業に適合させるため次のように整理統合して設置することとした。その概要は

図書館学（原論）（通年、週2時間、4単位）自由選択科目として文学部に設置〔図書館通論 1単位、図書館史 2単位、視聴覚資料 1単位〕

図書館学（各論）（通年、週2時間、4単位）選択科目として教職課程に設置〔図書選択法 1単位、図書分類法 1単位、図書目録法 2単位〕

図書館学（応用論）（通年 週2時間 4単位）昭和28年度設置の予定

図書館実務 1単位（夏期臨時講習会）

であり、上記のうち翌1953（昭和28）年に設置が予定されていた「図書館学（応用論）」は省令科目の「レファレンス、ワーク」「図書館対外活動」「児童に対する図書館奉仕」および「図書運用法」の計4単位であった。以上の合計13単位と既に専門科目として文

学部設置されていた「社会学」「社会教育」或は「新聞学」のうちから2単位以上を履修すれば当時の『図書館法』第6条の2項の要求する単位数即ち15単位以上を充たすとしたのである¹⁸⁾。以上のような構想のもとに1952(昭和27)年度は「図書館学(原論)」「同(各論)」の2科目8単位が正規の課程で開講され、夏期大学においても「図書館実務」「図書館学(各論)」および「同(応用論)」の3科目9単位が開講されたのである。科目の担当者は前年秋に教職追放が解除されて大学図書館主任に復職した小野則秋氏が嘱託講師として、これに当たった¹⁹⁾。但し「夏期大学」では小野講師を助けて代講というかたちで小畑渉、多田光の両氏および青木次彦が分担した。この「夏期大学」のうちの図書館学は7月14日から8月1日(前期)と8月4日から8月23日(後期)に土・日曜は休講とし、毎日午前8時から12時40分までの授業であった²⁰⁾。このようにして正規の課程の科目と「夏期大学」の科目を併せれば1年間の履修でも省令科目・単位を充たし、司書資格の申請と授与が可能となり、実質的に完全にいわゆる司書課程が成立したといえよう。当時、司書課程というような組織があったわけではない、教職課程教育の運営実施については教職課程委員会が当り、関係事務は教務部(レジストラ)で行なわれていたが、この司書課程といえるものは大学の組織上は教職課程に付設されたものと思われるが、関係事務は実質的に、これまでの経緯から大学図書館庶務係が処理するという異例な状態が続いていた。なお、図書館学科目の履修は全学部に開放されていたが、司書資格ならびに教職免許状取得には有効ではあったが、卒業要件の単位には算入されなかった。

翌1953(昭和28)年度については前年通りでは総単位数では十分ではあるが、選択科目については必ずしも十分ではなく、特に「夏期大学」のみ聴講の場合は省令乙群科目が不足することもあるので、これを補うために一部修正が加えられ、前年度1単位の科目として「夏期大学」に設けられた「図書館実務」を「図書館学(実務論)」4単位とした。その内容は省令科目の「図書及び印刷史」「図書解題及び図書評論」(以上乙群選択科目)「図書館実務」(必修科目)「特殊資料」(甲群選択科目)で、これを前年度から予定していた「図書館学(応用論)」とともに正規の課程で開講し、「夏期大学」ではこの「同(実務論)」と「同(原論)」が開講された。これによって図書館学関係科目は設置科目数には変化はなく7科目であったが単位数の総計は19単位から22単位へと増加した。そして学内での司書資格取得に必要な単位数は16単位以上としていた。

ついで1954(昭和29)年に第Ⅱ部(夜間)が設置され、図書館学関係科目も1956(昭和31)年にまず「図書館学(実務論)」が開講されて「夏期大学」のものと併行履修すれば2乃至3年で司書資格の取得が可能になった。そして、この第Ⅱ部を含めて、第Ⅰ部(昼間)と「夏期大学」で図書館学の科目はローテーションを組み、毎年度第Ⅰ部と「夏期大学」では2科目8単位が、第Ⅱ部では1科目4単位が開講されるのを通例とし

て、この状態が1960（昭和35）年まで続いた。これら科目の担当者は前述の小野則秋氏が嘱託講師として中心となり、年度によって多少異なるが竹林熊彦氏、仙田正雄氏なども加わり²⁰、のち吉田貞夫氏が最初は嘱託講師として参画したが、図書館学の専任教員は不在で、吉田貞夫氏が専任講師として司書課程の中心となったのは1960（昭和35）年になってからであった²¹。

IV 司書課程の充実と司書教諭課程の発足

上述の如く、同志社大学の図書館学教育は現職者の研修を目的とした同志社大学図書館学講習所を実質的に引き継いだかたちで、まず同志社夏期大学という特異な講座で出発し、ついで司書養成乃至は現職者の研修・司書資格の取得を目的とした、いわゆる大学における司書課程として一応の形式を整え、大学教育のなかに、ある定着をしつつあった。そして1960（昭和35年）10月には、それまで嘱託講師として図書館学科目を担当してきた吉田貞夫氏を専任講師として新任し、はじめて専任教員を置くこととなった。そして一方で、科目の再編と名称の変更および一部科目の増設を実施し、1961（昭和36）年度からは10科目28単位が設置された。増設された科目は「図書館実習」（2単位）であり、この2単位と従来2単位の履習が認められた「社会学概論」「新聞学概論」は各4単位とされ計6単位が増加したこととなった。そして、司書資格取得要件の単位数も18単位以上となったのである。その設置科目の編成を新旧対象すれば次の通りである。

図書選択整理法	旧各論	4単位	必修
図書館奉仕論	旧応用論	4単位	必修
図書館学概論	旧原論・実務論	2単位	必修
視聴覚資料	旧原論	2単位	必修
図書館資料論	旧実務論	2単位	必修
図書館実習〔新設〕		2単位	必修
社会学概論	旧同	4単位	選択
新聞学原論	旧同	4単位	選択
社会教育学	旧同	2単位	選択 ²²

上記「図書館実習」は省令科目の「図書館実務」とは全く別に設けられたもので、図書館学、特に司書養成は現場図書館と密接な関係にあるという考えのもとに実施されたもので、教室に於ける実習（1単位）に大学図書館における実務実習（1単位）を課することとし、当初は小野則秋嘱託講師（図書館整理課長）が担当して大学図書館内で、何らかの実務を体験させていたが、のち大学図書館各課係のすべての実務を館員の指導のもとに実習することとなり、さらに1964（昭和39）年以降は京都府立総合資料館、大阪

市立中央図書館、滋賀県立図書館へも実習を依頼し、現在も名称は現場演習と変わったが、より多くの館の協力を得て実施されている。

この間にあって1962（昭和37）年度からは年来の懸案でもあった『学校図書館法』による司書教諭資格の取得を可能にする、いわゆる司書教諭課程の併設を発足させるため、「学校図書館概論」1科目2単位を新しく設置して同時に開講した。これは司書課程科目の1部を充当して成立したもので、その科目一覧は次のようであった。

学校図書館概論 2単位（省令科目：学校図書館通論 1単位、学校図書館の利用指導 1単位）

図書選択整理法 4単位（省令科目：図書の選択 1単位、図書の整理 2単位）

図書館奉仕論 4単位（省令科目：学校図書館の管理と運用 1単位、児童生徒の読書活動 1単位）

図書館資料論 2単位（省令科目：図書以外の資料の利用 1単位）

以上のように学校図書館の側面からは不満足なものではあるが、4科目12単位で、もちろんすべてが必修であった。なお、一方で図書館学科目は当初教職に関する専門科目のうちの選択科目として4単位が認められていたがのち2単位が認められ、1957（昭和32）年以降は上記選択科目から除かれたのである⁹⁰。司書教諭課程は教職課程と密接な関係にあるのは当然であるが、教職課程と司書課程も元来は緊密な関係にあって然るべきであると思われるが、いつしか、その関係が希薄となってしまったのである。

それはともかくとして、一応年を追って充実が計られ、特に第Ⅰ部において毎年度、全科目開講に向けて努力され、3乃至4科目10単位乃至12単位が開講、第Ⅱ部は2乃至3科目6単位が、「夏期大学」では2乃至4科目8単位が開講され、受講生も累増を見た。そして「夏期大学」では一般社会人の聴講者も多かったが、1963（昭和38）年、従来の名称を同志社大学夏期講座と改め、一般社会人の聴講は可能ではあるが、免許資格については学生及び同志社大学卒業者に限り取扱うということになって、受講生の主力は在学生となり、この点については社会人に門戸を開いて貢献した⁹¹のは過去のこととなってしまっ、当初の趣旨からはいささか残念といわざるを得ない。

前にも述べたように最初、文学部と教職課程に設置されていた図書館学科目も、本来、科目の設置は学部とすべきであるとされ、図書館学科目はすべて文学部の設置に改められたが、受講については全学部に許可され、司書課程及び司書教諭課程の運営実施については担当教員が当り、かつては関係事務を図書館庶務係で行なっていたこともあったが、やがて本来の教務部教務課教職課程係が分掌し、組織的には整ってきたが、さらに教職課程委員会の例に倣って、全学的な組織として博物館学芸員課程・図書館司書課程委員会（略称：博図委員会）が1967（昭和42）年7月に構成されて両課程の運営実施に当り、関係事務は従来通り教職課程係が当ることが明確にされた⁹²。そして、これまで

図書館課程、図書館学課程あるいは図書館司書課程などと称してきた、いわゆる司書課程の名称が確定したのであった。

なお、この時期の科目担当者は専任教員の吉田貞夫氏が中心となり、小野則秋、重久篤太郎、小倉親雄の各氏が嘱託講師としてそれぞれに科目を担当し、のち青木次彦がこれに加わった。

V 省令改正と専任教員の増員

1968（昭和43）年3月、『図書館法施行規則』（省令）が昭和43年文部省令第5号によってその1部が改正され、司書講習の科目・単位も改正されて司書資格取得の要件単位数が15単位から19単位にと増加した。これに対応すべく、翌1969（昭和44）年から設置科目の変更と単位数の増加が計られて次のように定められ実施に移された。

図書館通論 2単位（省令科目に同じ）

図書館資料論 2単位（同上）

参考業務 2単位（同上）

図書館活動 2単位（同上）

資料目録法 2単位（同上）

資料分類法 2単位（同上）

図書館演習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、（現場演習を含む） 4単位（省令科目：資料目録法演習、資料分類法演習、参考業務演習 各1単位）

図書及び図書館史Ⅰ（日本）、Ⅱ（欧米） 各2単位（省令科目に同じ 1単位）

情報管理 2単位（同上）

社会教育学 2単位（省令科目：社会教育 1単位）

視聴覚教育 2単位、（省令科目に同じ 1単位）

人文科学及び社会科学の書誌解題 2単位（省令科目に同じ 1単位）⁷⁰

科目の名称は一部を除いて殆んど省令科目のそれと同一としたのは同志社大学としては初めてのことといえよう。ただ「参考業務演習」「資料目録法演習」および「資料分類法演習」を合せて「図書館演習」として図書館現場における演習（実習）を含ませたのは従前の「図書館実習」を引き継いで、少しでも図書館現場を実感させようとする趣旨によるものである。また「図書館実習」の場合もそうであったが、この度の演習も受講生の人数に応じてクラス分けをして教育効果を上げるよう配慮してきた。なお、「図書及び図書館史」をⅠ、Ⅱ各2単位設けているのも以前から図書館史を比較的重要視してきた伝統によるもので今に引き継がれてきている。以上のようにして、総設置科目・単位数は14科目30単位となり、省令に準じて必修・選択を定め、合計24単位以上の履修

を司書資格の必要条件とした。さらに1971（昭和46）年度からは文学部社会学科設置の「社会調査」のうち前期2単位を司書課程の選択科目としたので総科目・単位数は15科目32単位となったのである。

一方司書教諭課程についても自動的に科目名称が変り次のようになったが科目・単位数には変更はなかった。

学校図書館通論 2単位（省令科目：学校図書館通論、学校図書館の利用指導 各1単位）

図書館通論 2単位（省令科目：学校図書館の管理と運営 1単位）

図書館活動 2単位（省令科目：児童生徒の読書活動 1単位）

図書館資料論 2単位（省令科目：図書の選択、図書以外の資料の利用 各1単位）

資料目録法 2単位（省令科目：図書の整理 2単位）

資料分類法 2単位（同上）⁸⁹

以上のように従前と同じく資格取得に必要な単位数は12単位で省令の8単位より多いが、この課程として固有なものは「学校図書館通論」のみというのは淋しい限りである。

しかし、受講生の年々の増加、省令改正と、さらには1969（昭和44）年度以降、第Ⅰ部における毎年度設置科目全部の開講が実施されて、それまでも検討されていた専任教員の増員が審議決定して、翌1970（昭和45）年度より1名の増員が実現し、青木次彦が専任講師として新任されたのである。以来第Ⅰ部については設置科目のすべてを休講することなく開講し、Ⅱ部についても休講科目の減少につとめることとした。例えば同年度について見るならば第Ⅰ部では「図書館通論」（吉田貞夫）「図書館資料論」（同）「参考業務」（青木次彦）「資料目録法」（同）「資料分類法」（吉田貞夫）「図書館活動」（小野則秋）「図書館演習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」（A、B 2クラス：吉田貞夫・青木次彦）「図書及び図書館史Ⅰ」（小野則秋）「同2」（小倉親雄）「資料整理法特論」（青木次彦）「情報管理」（吉田貞夫）「社会教育学」（藤原英夫）「人文科学及び社会科学の書誌解題」（荒岡興太郎）「視聴覚教育」（苧阪良二）と14科目30単位の全部を開講し、別に「学校図書館通論」（吉田貞夫）を加えた。第Ⅱ部については「図書館資料論」（青木次彦）「参考業務」（同）「資料目録法」（同）「資料分類法」（吉田貞夫）「図書及図書館史Ⅰ」（小野則秋）「資料整理法特論」（青木次彦）「情報管理」（吉田貞夫）「人文科学及び社会科学の書誌解題」（荒岡興太郎）の8科目18単位と第Ⅰ部の場合と同じく「学校図書館通論」（吉田貞夫）とであった⁹⁰。さらに夏期講座でも「図書館通論」（吉田貞夫）「図書館活動」（同）と「図書館演習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」（青木次彦・服部純一・板垣龍）の3科目8単位が開講されている⁹¹。

設置開講の科目・単位数が多くなったことや、受講生が増加したことはある意味では

好ましいことではあるが2名の専任教員では不十分で、多くの嘱託講師の援助を必要とし、時間割の編成にも苦慮しなければならなくなり、前・後期に別れる2単位科目は、大学の他の科目が多く通年科目であることもあって不便もあり、また将来の飛躍も考慮し、再度科目の再編が検討されて必修科目は通年（講義は4単位、演習は2単位）の科目とし、1974（昭和49）年度から次のように改訂実施した。

- 図書館・情報学Ⅰ 4単位（旧図書館通論・情報管理各2単位）
- 図書館・情報学Ⅱ 4単位（旧資料目録法、資料分類法各2単位）
- 図書館・情報学Ⅲ 4単位（旧図書館活動、参考業務各2単位）
- 図書館・情報学Ⅳ 4単位（旧図書館資料論、人文科学及び社会科学の書誌解題各2単位）
- 図書館演習Ⅰ 2単位（旧図書館演習4単位）
- 図書館演習Ⅱ 2単位（旧同上より分離）
- 図書館史 2単位（図書及び図書館史Ⅰ2単位）
- 図書館学特論 2単位（図書及び図書館史Ⅱ2単位）
- 資料整理法特論 2単位（旧に同じ）
- 社会教育学 2単位（旧に同じ）
- 社会調査 2単位（旧に同じ）
- 視聴覚教育 2単位（旧に同じ）^㉑

以上である。内容として変化に乏しいが総計は12科目32単位で、これに「学校図書館通論」を加えると13科目34単位となる。ただし、「社会教育学」と「社会調査」は基準としては2単位であるが、本来4単位の科目として設置されているので通年4単位として登録履習するよう指導している。（第Ⅱ部の場合は前期2単位である。）なお「図書館演習Ⅰ」「同Ⅱ」は第4年次以上の学生が履習することとしており、教室における演習のほか現場図書館に於ける演習（実習）を4日間課しているのは従来からの伝統で、これを加えると実質は合計5単位に当たると考えられよう。そして学校図書館司書教諭課程の科目も自動的に変更されて次のようになっている。

- 学校図書館通論 2単位
- 図書館・情報学Ⅰ 2単位
- 図書館・情報学Ⅱ 4単位
- 図書館・情報学Ⅲ 2単位
- 図書館・情報学Ⅳ 2単位^㉒

科目数の変更も単位数の変更もないが本来の4単位科目は、基準は2単位であっても4単位として履修するよう指導している。そして以来現在まで、このような履習要項で実施されてきていて、1983（昭和58）年度の開講状況は第Ⅰ部については「図書館・情

報学Ⅰ」(吉田貞夫・渡辺信一)「同Ⅱ」(渡辺信一・山田泰嗣)「同Ⅲ」(岩猿敏生)「同Ⅳ」(河合忠信)「図書館演習Ⅰ」(吉田貞夫・渡辺信一)「同Ⅱ」(青木次彦)「図書館史」(同)「図書館学特講」(森耕一)「資料整理法特論」(埜上衛)「社会教育学」(国生寿)「社会調査」(井垣章二)「視聴覚教育」(竹田真理子)及び「学校図書館通論」(渡辺信一)。第Ⅱ部は「図書館・情報学Ⅰ」(青木次彦・大城善盛)「同Ⅱ」(村田修身)「同Ⅲ」(青木次彦)「同Ⅳ」(河合忠信)「図書館演習Ⅰ」(服部純一)「同Ⅱ」(青木次彦)「資料整理法特論」(埜上衛)「社会教育学」(国生寿)と「学校図書館通論」(山田泰嗣)が開講されている⁹³⁾。そしてこれらの課程は第2年次から履習が認められていて必修・選択合せて24単位以上を履習しおえた学生に卒業と同時に司書資格証明書が申請によって交付され、司書教諭の場合は司書教諭講習実施大学への申請を経て後日証明書が与えられるわけである。

近年の司書資格取得者数は42名乃至91名と幅があるが増加の方向にあり⁹⁴⁾、司書教諭の場合も24名乃至76名と変動はあるが同じく増加の傾向にあるといえよう⁹⁵⁾。なお1968(昭和43)年の省令改正前後には100名を越える年もあって、その頃と比べると必ずしも増加の一途をたどって来たとはいえない。

なお上述のような時期に1960(昭和35)年以来、この両課程の中心となって教育に専念してこられた吉田貞夫教授が1973(昭和48)年度末に退職され滋賀大学経済学部教授に転出されたが、1975(昭和50)年4月には渡辺信一氏(京都産業大学専任講師)を専任講師として迎え頓挫することなく進めることができた。また1975(昭和50)年以降、以前から計画していた図書館司書課程の年度報告を『同志社大学図書館学年報』として刊行、本年(1983年)6月には第9号の発行を見ることができた。

Ⅵ 図書館学科目の学内における位置づけ

図書館学科目は当初から免許資格関係の専門科目として設けられてきたので、免許資格にのみ有効であって、いわゆる卒業単位としては取り扱われていなかった。前にもふれているが1952(昭和27)年にはじめて設置された時も文学部の専門科目のうちの自由選択科目と教職課程の教職に関する専門科目のうちの選択科目との二つとして設けられたが、前者は司書資格に関しては有効であるが、選択履習が自由であって卒業単位には算入されないものであり、後者は司書資格に関してと、教職課程の選択科目としてののみ有効であるものとされていたのである。その後、文学部で「自由科目」あるいは「随意科目」と、その名称が変化することはあったが、基本的な取扱いについては永年の間変わることがなかった、ただ図書館学科目の設置が文学部文化学科と現在と同じように明示されたのは1954(昭和29)年以来である⁹⁶⁾。一方、教職に関する専門科目のうちの選択

科目に設置されていた「図書館学」はそののち組織も変更されて、すべての図書館学科目は文学部文化学科設置となり、前述のように教職課程の選択科目中からも除かれている。

しかし、ある程度学内で図書館学が定着し、担当の専任教員が置かれるようになって、その教員の所属が上記科目設置と同じ文学部文化学科となり、文化学科では専攻にわかれていたので、やがて他の専攻よりも比較的自然と考えられて教育学専攻に一応の所属が決まることとなった。このような事情もあって、図書館学担当教員は文学部文化学科教育学専攻に所属し、その科目についても設置の事実上の責任を同専攻が持つこととなったのである。もちろん全学に開かれた課程であるので、課程としての運営は博物館学芸員課程・図書館司書課程委員会が当るが、この委員会には図書館学担当教員以外に教育学専攻の教員1名が代表として加わることになっていて、司書課程と教育学専攻との関係が緊密なものとされているのである。

上述のような事情もあって、図書館学科目は1部が教育学専攻の専攻選択必修、あるいは選択科目に繰り入れられるようになった。はじめ、教育学専攻の専攻選択科目のなかに「学校図書館通論」「資料分類法」「資料目録法」各2単位が入れられ、また、文化学科国文学専攻及び第Ⅱ部の同専攻では専攻選択科目のうちに「図書館学、学校図書館司書教諭に関する科目」などとして⁹⁰⁾、英文学科では関連科目として「資料整理法特論」「学校図書館通論」が、また第Ⅱ部英文学科では関連科目として図書館学科目の全てが入れられ、わずかではあるが卒業単位として認められるようになった⁹¹⁾。しかし、これがそのまま定着したわけではなく1970（昭和45）年度の教育学専攻履修科目表は大学紛争の影響もあって大幅に変更され、図書館学科目は選択科目のなかに明示されていない。それが翌1971（昭和46）年度には復活し、今度は教育学専攻の選択科目Ⅱに「図書館通論」「学校図書館通論」「資料目録法」「資料分類法」各2単位が入れられて教育学専攻の学生は専攻の選択科目として履修することができるようになった⁹²⁾。そののち前述のように科目名称の変更と統合が行なわれ、一方、図書館学担当の専任教員が教育学専攻に属する教員として、教育学専攻の必修科目を担当するようになり、「教育学基礎演習Ⅰ」「同Ⅱ」「演習Ⅰ」「同Ⅱ」各4単位と「卒業論文」12単位の指導を分担することとなった。そして1973（昭和48）年には吉田貞夫教授が「教育学基礎演習Ⅱ」「演習Ⅱ」と「卒業論文」の指導を青木次彦助教授が「教育学基礎演習Ⅰ」をそれぞれ分担担当し以来、現在に及んでいる⁹³⁾。

このように教育学専攻に於いて明確な位置付けがなされてきて、現在では「図書館・情報学Ⅰ」は選択必修科目に、「同Ⅱ」は選択科目Ⅰに、また「同Ⅲ」は選択科目Ⅱにそれぞれ入れられて、教育学専攻の学生は不十分ながらも教育学専攻のなかで図書館学を専攻することが可能となっているといえよう⁹⁴⁾。しかし学内事情も流動的であり、正

規の図書館学専攻ではないので問題もあり、完全に定着したと断言することは早計であろう。

おわりに

長い道程を経て、前述のような現状にたどり着いていることを略述した。図書館学教育が、免許資格関係の科目としてのみではなく、本来の大学教育のなかに確固とした位置づけがなされるまでには、まだまだ多くの問題があろう。それは図書館学の学問性と大学教育での位置づけの問題であり、それは教授会の問題でもありとともに図書館学担当教員自身の問題であるのは当然であるが、一方で受講学生の意識の問題であり、広くは館界・学会の実績の問題でもあろう。また私学に於いては、あらゆる意味でのメリットというような問題もある。

わが国の多くの大学がそうであるように司書講習を大学教育に取り込んできた状態では、あまりにも問題は多いし、それは常に指摘されてきているが、一たん、それが定着すると、それから抜け出して本来あるべき大学教育における図書館学として、その教育と研究をより発展させるのは必ずしも容易ではないのではなかろうか、同志社大学の場合は図書館学の問題に止まらない大学自体が解決しなければならない大きな懸案、その第1は校地問題であるが、そのために学部・学科・専攻の増設はもとより、1科目といえども増設が認められない状態が永年続いてきた。同志社大学における図書館学の改善発展には長期の月日と、関係者の莫大な努力が必要であるといえよう。

30数年しか経過していないともいえるが、その間、複雑な歩みもあり、関係者の交替、あるいは管掌部署の移動などのため史料の収集整理も十分な状態ではなく、残念ながら不正確な部分や誤認・誤記があるかも知れない、寛恕を乞うて後日を期したいと思うや切である。

〈注〉

- (1) 植山正樹「同志社大学『園学研究会』ヲ通ジテ園界ニ望ム」『園研究』15(3)、昭17、p.235～241など関係資料は拙稿「同志社大学図書館学研究会について」『同志社大学図書館学年報』8、'82、p.94～95を参照されたい。
- (2) 同志社大学図書館『自昭和16年4月図書館学研究会記録』（書類綴）
- (3) 小野則秋「同志社大学図書館学会20年の回顧」『同志社大学図書館学会紀要』4、'61、p.9～10
- (4) 同上論文、p.8
- (5) 同上論文、p.8～7
- (6) 同志社大学図書館学研究会『第1回同志社大学図書館学講習所記録』昭和21年度（書類綴）なお、この記録の大要は拙稿「同志社大学図書館学講習所の創設」『同志社大学図書館学年報』9、'83、

p.84～91に紹介した。

- (7) 同上書類綴
- (8) 同大図書館学研究会『第2回同大図書館学講習所記録』昭和22年度（書類綴）
- (9) 同大図書館学研究会『第3回同大図書館学講習所記録』昭和23年度（書類綴）
- (10) 同大図書館学研究会『第4回同大図書館学講習所記録』昭和24年度（書類綴）
- (11) 同上書類綴
- (12) 同大図書館学研究会『第5回同大図書館学講習所記録』昭和25年度（書類綴）
- (13) 同上書類綴
- (14) 小野則秋、前掲論文、p.8～9
- (15) 『京都府公報』昭25. 8. 1、「5教職第70号」
- (16) 同大図書館学研究会『第6回同大図書館学講習所記録』昭和26年度（書類綴）
- (17) 同志社大学『同志社大学要覧』昭和27年度、p.98
- (18) 同志社大学教職課程委員会『教職課程手引—附司書資格—』昭和27、p.25～26
- (19) 同志社大学『同志社大学要覧』昭和27年度、p.94
- (20) 『同志社夏期大学図書館学聴講詳細』昭和27年度（司書課程関係書類綴）
- (21) 同志社大学『同志社大学要覧』昭和33年度、p.128
- (22) 同志社社史史料編纂所『同志社九十年小史』同志社、昭和40、p.374
- (23) 『図書館学課程科目一覧表』昭和36年度（司書課程関係書類綴）
- (24) 同志社大学『教職課程要覧』昭和32（1957）年版、付表Ⅱ
- (25) 同志社社史史料編纂所、前掲書、p.304
- (26) 同志社『同志社例規集』p.88
- (27) 『図書館司書課程要項』昭和44（1969）年4月1日改正、p.4（司書課程関係書類綴）
- (28) 『学校図書館司書教諭課程要項』昭和44（1969）年4月1日改正 p.4（同上）
- (29) 同志社大学『文学部履習要項』1970年度、p.75
- (30) 同志社大学『昭和45年度同志社大学夏期講座要項』p.4、（司書課程関係書類綴）
- (31) 『図書館司書課程要項』昭和49（1974）年4月1日改正、p.4（司書課程関係書類綴）
- (32) 『学校図書館司書教諭課程要項』昭和49（1974）年4月1日改正（司書課程関係書類綴）
- (33) 同志社大学『文学部履習要項』1983年度、p.22～23
- (34) 同志社大学図書館司書課程「図書館司書資格取得状況」昭和44～57年度『同志社大学図書館学
年報』1～9、'75～'83
- (35) 同上「学校図書館司書教諭資格取得状況」昭和44～57年度『同上』同上
- (36) 同志社大学『同志社大学学部学則』昭和29年4月1日改正、p.19
- (37) 同志社大学『文学部文化学科履習要項』1969年度、p.28、45、50
- (38) 同志社大学『文学部英文学科履習要項』1969年度、p.38、48
- (39) 同志社大学『文学部・文学研究科履習要項』1971年度、p.102
- (40) 同志社大学『文学部履習要項』1948年度、p.94
- (41) 同志社大学『文学部履習要項』1983年度、p.22～23

（青木次彦「同志社大学図書館学教育史稿」『図書館学の教育』日本図書館学会研究委員会編 目外アソシエーツ発行 1983年9月 p.41～64より転載）

（あおき つぎひこ。元文学部教授（論文発表時 文学部教授））